

吉蔵『二諦章』の思想と構造

平井俊榮

一 『二諦章』の文献批判

(一)

二諦論は三論教学の中心的教義であり、したがって、その大成者吉蔵（五四九—六二三）の思想・教学を形成する一大根幹である。

従来吉蔵の二諦思想に関しては断片的には種々に関説せられ、筆者自身もかつて吉蔵の二諦説成立の思想的背景について若干の考察を試みたことがあった。^①しかし、多くの学者が指摘するように、その二諦論は実に複雑多岐な構造を有し、難解な思想を含んでいて、よくその全貌を解明した総合的な論稿は未だ皆無であるといつてよい。

ところで、二諦論は龐大な量をもって知られる吉蔵著作の随処に展開せられているが、なかでも独立の著述として『二諦章（二諦義）』二巻のあることは周知の通りである。しかも『二諦章』に関しては今日その国訳すらなされていないの

が現状である。これはおそらく吉蔵の主著『大乘玄論』冒頭の「二諦義」の一章が比較的簡潔にまとめられていて、これに比較するとき、本書はいたずらに煩瑣な内容と冗長な表現をもつところから、自ずと忌避されたと思われる点や、現存のテキストには論文自体に重大な欠落があり、研究の対象として完全なものが見なされていなかったこともある。しかし、最大の理由はその構造の複雑と思想の難解にあることは容易に首肯されることである。しかも『玄論』二諦義の簡潔な表現は完成された思想を知る上には此の上なく便利であるが、その思想の形成の課程を見ようとする場合には『二諦章』の晦渋な論述の方がより貴重でもあるし、また、前者の極度に整理凝縮された論述には省略も多く、不明確なことも多いが、後者の豊富で精緻な内容はそれを補って余りあるものがある。したがって、この両者を併せ参照することによって吉蔵二諦思想の全体像はより明らかなものとなるはずである。そこで本稿は、必ずしもその註釈的研究を意図するもの

ではないが、従来あまり省り見られなかった『二諦章』三巻に準拠しながら、前述せる拙稿の不備を補う意味で、吉蔵二諦説成立の基盤と背景を鳥瞰すると同時に、新たにその思想の組織・構造について全体的な説明を加えて見たいと思う。

(二)

現存する『二諦章』のテキストは次の二種であるが、細部に渡って異同はない。

①大正新脩大蔵経第四五巻七七頁―一一五頁 No. 3854

②大日本統蔵経第一輯第二編第二套第三冊二四七丁―二八七丁

この現存叢書の底本となった刊本についても二種あり、初め元録十年（一六九七）仙台竜宝寺の実養が、或る名刹の宝蔵より上・下二巻を得て校刊したものが先ず存在し、のち宝永七年（一七一〇）洛西五智山沙門慧旭寂公が、さらに古写本によって先の刊本の魯魚を訂正し、中巻の全文、及び上巻中の二十余紙の脱文を補って校刊したものが底本となっている。この間の事情については「鑄二諦章叙」と「補刻二諦章叙」という現存叢書に記載のそれぞれの序書によって知ることがができる。これによって見るに『二諦章』三巻の校刊は既に近世になってからであり、その間長く散佚していたことが知られ、現存のテキストにも遺漏のあることは容易に推定されるのである。

経録の記載から見ても、

①奈良朝現在一切経疏目録

には「二諦章三巻吉蔵撰」と存在が記され、景雲元年（七〇四）に古文書に記載されている。^③

②三論宗章疏録（安遠録）（大・五五・一二三八・上）

は元興寺安遠律師による延嘉十四年（九一四）の選述であるが、同書にもその存在が確認されている。しかし、嘉保元年（一〇九四）成立の

③東域伝燈目録（永超録）（大・五五・一二六一・下）

には「二諦章一卷吉蔵撰」とあり、一卷本として記録されている。

また日本の代表的な三論学者間における伝承については、まず代表的な碩学である安澄（七六三―八一四）の名著『中観論疏記』は各種経論の引用註記が豊富で、資料的にも当時の現存書籍の状態を知る上にきわめて好都合であるが、本書の引用はない。『中論疏記』の選述は延暦二十年（八〇一）から大同元年（八〇六）にかけてであり、当然その存在は予想されて然るべきであるのに、全く言及せられていないのは気がかりである。しかし、同書は本来吉蔵の『中観論疏』の註釈書であり、その性格上特に引用する必要を認めなかったものかとも思われる。なぜなら、同時代人の玄叡による『大乘三論大義抄』の成立は天長年間（八二四―八三四）であるが、同書にはこの引用を見ることができからであり、下って、珍海

(一〇九一—一一五二)の主著『三論玄疏文義要』は保延二年(一一三六)の作であるが、これにも引用せられている。したがって前述の刊本の序書にいうように本書がながく消失していたと考えられるのは珍海以後のことであろう。

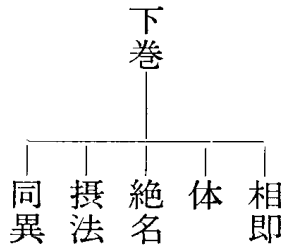
いずれにしても、以上の経録や代表的な三論学者の伝承ではいずれもこれを吉藏の著作と認めているので、本書が吉藏の真撰であることは間違いないが、現存のテキストが完全な形でないことは次のような本書の組織からしても窺われる。

(三)

すなわち本書は上・中・下三巻を次のように七科に分けて論述している。

上巻——大意

中巻——釈名



これに対し、同じく二諦を扱った『大乘玄論』巻第一や慧均の『大乘四論玄義』(『大乘三論玄義記』)巻第五の「二諦義」の科文は、いずれもこれを十科に分っており、これを対照すると次の如くである。

『二諦章』 『大乘玄論』 『大乘四論玄義』

(1)	大意	(1)	大意	(1)	大意
(2)	釈名	(2)	釈名	(2)	釈名
(3)	相即	(3)	立名	(3)	立名
(4)	体	(4)	有無	(4)	有無
(5)	絶名	(5)	体	(5)	観行
(6)	摂法	(6)	中道	(6)	相即
(7)	同異	(7)	相即	(7)	体相
(8)		(8)	摂法	(8)	絶名
(9)		(9)	辨教	(9)	摂法
(10)		(10)	同異	(10)	同異

(項目名のみで
内容は欠落)

二諦を十科に分つて論ずることについて慧均は、

二諦は実に前にも非ず後にも非ず、復一時に非ず、豈に重数有らんや、但、開善寺の十重を対破せんが故に、差別無きに差別して十重に之を釈す。(卍・一・一・七四・一・一八・左下)

と述べている。同様趣旨のことを吉藏も『二諦章』のなかで法朗(五〇八—五八一)の言として、

我山を出でて以来二諦を以て正道と為す。二諦を説くに凡そ二十余種の勢あり。或いは散じ或は束ね、或いは章段を分ち或いは分たず。分つときは或いは開いて三段と為し、また十重に作る。十重を為す所以は開善法師の二諦義に対せんが為なり。彼れ二諦義

を明かすに十重あり。彼の十重に對せんが故に十重を明かし一一の重に以てこれを辨正せん。(記・一・二・二・三・二四七・左上—二四八・右上)

と述べている。したがって、二諦を論ずるに當っては本来章段を設けないのが三論の建前であるが、専ら開善寺智藏(四五八—五三二)の二諦説に對するために十重の科段をなすことが行なわれたと見てよい。したがって『二諦章』も当初の組織においては十科に分つてこれを論じたものであろうことは明らかで、次に吉藏自身「十重とは初めは則ち二諦の大意、最後は二諦の同異なり」と述べていることからしても、現存『二諦章』の七科文の組織は、本来十章に科文されたもののうち三項目(『大乘玄論』の項目から推してそれは有無・中道・辨教の三)が欠落したものと考えられる⁴⁾。

二諦を十門分別する原型となった開善の二諦説については、今日その内容は吉藏等の著作に引用される所から断片的にしかこれを知る由もないが、この十重の科文の次第については、珍海の『三論名教抄』巻第一「二諦義」に、

義集又云く、開善の大義第八卷二諦義に云く、二諦を釈するに十重あり、一序意、二釈名、三出体性有無義、四即離、五攝法、六真理無階級、七会衆難、八夷神絶果、九寂照昨世俗、十遍融通(大・七〇・六九三・中)

とある十項目がそれであろうと思われる。大義第八卷とは

おそらく開善寺智藏の『成実論大義記』第八卷二諦義である。十項目の表題については三論系のそれと全く異質であるが、これが後代二諦を十門分別する原型であったということは、二諦論の形式の点でも開善説が一つの基準であったことを示すものである。

(四)

本書の製作年代を示す直接的な記載は何もない。また嘉祥の他の著述との相互の引用関係も見られないし、古来三論関係の各種の註疏においても、直接『二諦章』の成立時期について言及しているものはない。そこで筆者はかつて吉藏の著述全般を整理して、相互の引用関係という一視点からその後関係について若干の論考を試みた際、その製作年代に関しては簡単に、手がかりの得られないものとして別出しておいた⁵⁾。これに對して法政大学の泰本融教授は『中觀論疏』と本書の文を数カ所にわたつて対照比較され、その成立を『中觀論疏』の成立よりやや以前であろうと推論されている⁶⁾。そして『中觀論疏』ではその成立以前の著作の本文が主として要約または趣意の形で採用されているのが普通である点に着目されて、一例として同書に「真俗異体は一に經の相即の言を害う」とある経が、すでに『二諦章』では涅槃・小品・淨名の三つを具体的に指示し、それぞれの經文を引いている点、さらに全体の説相から『中觀論疏』が『二諦章』の文を参照

しつつ、それ以上に思索を加えたいとの印象を基に、先の結論を得ておられる。筆者もこの御指摘を全面的に肯うものである。

二諦をまとめて扱った吉蔵の代表的な論疏『大乘玄論』『中観論疏』『二諦章』の二本については、玄論が中論疏以後の成立であることは吉蔵自身が玄論の中に指摘していることとであり、泰本教授もその説相の簡略化の方向が二諦章→中論疏→玄論の次第順序であることを指摘されて、その成立の順序もこれに準ずるものであらうと推定されておる。この三本に限っていえば明らかに成立の順序は二諦章→中論疏→玄論であることは異論のないところである。

吉蔵が中論疏を含めて三論の註疏を最後の完成してゆくのは大業四年(六〇八)長安日嚴寺においてであって、その主要な動機となったものの一つに『百論疏』巻下に、

大業四年長安の三種論師に對せんが為なり。謂く、撰論・十地・地持の三種師は二無我の理及び三無性を明かして論の大宗と為す。今此の一品を立つるは、正しく之を破せんが為なり。応に「破二無我品」及び「破三無性品」と名づくべし。(大・四二・三〇二・中)

とあるように、当時北都長安における新興の学派であった撰論・地論等の諸論師に對して、自派の立場を明確化するという必要にせまられたことがあげられよう。したがって中論

疏はもとより、長安時代の著述には大なり小なり地論・撰論等の各派に對する論難を予想させるものが含まれている。二諦論争についても例外ではなく、簡略化の最終的なものであるべき玄論二諦義にも、「撰法門」第八に二諦を学するの得失について十句を列ねる第九相待門に、

問う、此れは何人を對治するや。答う、一つには撰論を学するの人、三性を執せず三無性の理を存するが為なり。(後略)(大・四五・二四・中)

として、撰論学派の三性三無性説を比較的詳しく紹介している一文がある。この『大乘玄論』の内容と同一のものが、長安における最も早い時期の著述で日嚴寺に住した直後、開皇十九年(五九九)に書かれた『浄名玄論』の中にも見出され、同書の巻第六に二諦を論じて有無定性門に約して得失を論ずる中に、『大乘玄論』と同じ趣旨で撰大乘及び唯識論人の三性、三無性説に言及している箇所を指摘することができる。

このように三論の註疏や浄名玄・大乘玄のように、長安時代を代表する著述には当時の新興学派である地論撰論等に對して何らかの形で論及を試みているのに、比較的詳しい内容を持った本書にその形跡が全く見られないということは、本書が少くとも長安時代の作品ではないことを示すものである。

また嘉祥は北行して長安に至る前、開皇十七年（五九七）四十九歳の九月から同十九年（五九九）五十一歳の二月まで、一年有半の間揚州慧日道場に滞在しているが、この間の著述としては『三論玄義』一卷と『華嚴經遊意』一卷の二つが挙げられる。時間的に見て本書がこれらと同時期に書かれたと考えるのにはいささか無理があるであろう。とすれば、おそらくとも本書が書かれた時期は会稽嘉祥寺に住していた時代かそれ以前ということになる。時間的な推移を示すものとして本書には法朗の臨終の際のことばを引いているが、法朗が示寂した隋の開皇元年（五八一）には吉蔵は三十三歳である。したがって『二諦章』の選述はこれ以降慧日道場に移った四十九歳以前の間ということになる。しかし吉蔵の著述活動が活発になったと考えられるのは開皇八年（五八九）隋が陳を滅ぼして吉蔵の身辺もようやく落ち着き、招かれて浙江省紹興府会稽嘉祥寺に住するようになった四十一歳頃からであると考えられるから、おそらく本書の成立も早くても四十歳前後であったろうと思われる。しかし彼の著述全体から見た場合、中論疏や玄論よりはかなり前の、いわば彼の習作時代の作品と考えられるのではなからうか。

(五)

『二諦章』そのものの註釈書と見なされる歴史的な末註の類いは全くないといってよい。これはおそらく三論教学の構

造の一環として二諦を研究することはあっても、独立の研究対象として本書を直接取り上げることがなかったからであろう。しかし一般に三論の二諦説を扱った独立の書というものもまた殆んどなく、筆者の知る限りでは写本の形で現存しているものに、東大寺所蔵の『二諦聽書』慧存宝曆七年（一七五七）⁽¹⁰⁾と、東京都の田中讓氏所蔵のもので、作者不詳の『無相大乘二諦義林章』一卷の古写本を挙げることができに留まる。また、天台系のものか三論系のものか不明であるが、東京哲学堂所蔵のものに作者不詳の『二諦義私記』一卷がある⁽¹¹⁾。

ほかに現存しないが、珍海が二諦義の解釈に多用しているものに、実敏僧都（七八八—八五六）の『二諦私記』一卷と、作者不詳の『二諦義集』一卷がある。前者の著者実敏は玄叡の弟子で、安澄にも師事し東大寺の三論を代表する論客であったことから、その全貌を窺うことのできないのは残念である。義集は伝教大師の作に凝せられて⁽¹²⁾いるが、珍海の引用から推して天台系のものというよりは三論系の二諦論であったと思われる。他に単独に二諦を論じたものではないが、二諦義を一章にまとめて述べているものは比較的多い。これは二諦が教義の根本であるから三論の章疏の構成としては当然のことであるが、そのなかで比較的明快な叙述を試みている有益なもの、玄叡の『大乘三論大義抄』巻第一（大・七〇・一二六・中）や、珍海の『三論名教抄』巻第一（大・七〇・六

九三・上)『三論玄疏文義要』卷第三(大・七〇・二三八・上)『大乘玄問答』卷第一(大・七〇・五六九・上)等に収録されている「二諦義」の各章である。

二 約教二諦の根本構造

(一)

吉蔵二諦説の最大の特徴は所謂約教の二諦を説いた点にあることは、彼の二諦思想について言及している論文すべての認めるところである。二諦が言教の形式であり、仏陀説法の手段・方法であることを強調した文は、彼の著作のいたる所に見られるが吉蔵はこれを標語の形で、

二諦とは蓋し是れ言教の通詮、相待の仮称にして、虚寂の妙実、中道を窮むるの極号なり。

明さく、如来は常に二諦に依って説法す。一つには世諦、二つには第一義諦なり。故に二諦は唯是教門にして境理に關わらず。(大・四五・一五・上)

と定義している。この定義づけの持つ特徴は、これに続いて彼が「常途三師置辞各異」として紹介している梁代の三大法師の表現と比較するとき一層顕著である。すなわち、

- (1) 開善は云く、二諦とは法性の旨帰、一真不二の極理なり。
- (2) 莊嚴は云く、二諦とは蓋し是れ祛惑の勝境、入道の実津なり。
- (3) 光宅は云く、二諦とは蓋し是れ聖教の遙泉、靈智の淵府なり。

という三説である。これらがいずれも境理をもって二諦とするいわゆる約理の二諦であることを示して、吉蔵は自らの約教二諦の立場を宣明しているのである。ところで、この二諦の定義をめぐって吉蔵二諦説を理解する二つの重要な視点を見出すことができる。すなわち、

(1) 一つは、すでに述べたことではあるが、彼の約教二諦の提示が根本的には梁代以降仏教論諍の一大中心思潮であった二諦論の大勢が、前記梁代の三大法師をもって代表される成実の約理の二諦説によってしめられていたことに対する、伝統的な三論成実の確執に基づく反論という形をもって打ち出されたことである。さらにそのための二諦約教の典拠としてとくに自宗の根本所依である『中論』観四諦品第八偈の一文を依用していることである。三論二諦義建立の根本理由に關して吉蔵が、

二諦は是れ教なりと明かす所以は、二義あり、一つには他に対してんが為なり。二つには経論を釈せんが為なり。

と云って、これに類似した表白をいたるところでおこなっているのは如上の点をいうに他ならない。また二諦教門の経証としては僧詮や法朗以来の『大品般若』や『涅槃経』『中論』等が伝統的な所依の経論であり、吉蔵自身もこれを踏襲していることは勿論であるが、とくに彼においては『中論』が主要論拠であることは、「今日依中論明二諦義」といっ

て『二諦章』において二諦の大意を明す場合に「観四諦品」の偈文の逐次の解釈によって論をすすめて行く点にも窺われるし、この定義の後段にもそれは明了に示されている。しかし、この点についてはすでに論じたこともあるので、ここでは重ねて述べることは省く。¹³⁾

(2)第二に、この定義づけは吉蔵二諦説の基本的立場をしめすと同時に、その思想の系譜に関して重要な示唆を与えるものである。というのは、均正『四論玄義』巻第五に、「解二諦大意置三四辞二不同」として略して五家の説を挙げる第四に、

宋国北多宝寺広州大亮法師の云く、二諦とは蓋し是れ言教の通詮、相待の仮称にして、窮宗の実因には非るなり。(卍・一・一・七四・一八・左下)

といつて、広州大亮の二諦の定義が紹介されている。これから推して吉蔵が自らの二諦説を定義した前掲のことばは、この広州大亮のことばをほとんどそのまま採用したものであること、また他に『二諦章』においても広州大高と誤写されてはいるが、彼の「指と月」の譬喩をもって示した約教二諦説を吉蔵が全面的に採り入れていることから、吉蔵二諦説の淵藪は、彼自身がその著述の随処に撰嶺興皇相承の自家の伝統説であることを強調しているにもかかわらず、その提唱者は明らかに道亮であり、僧朗を経由した北地からの伝承ではないという、学者の貴重な御指摘がなされている点である。¹⁴⁾

これは従来中国三論宗の系譜を論ずるに際し、僧朗以前の関中の旧義を古三論と呼び、僧朗・僧詮以後を新三論と称する伝統的な学説が存し、二諦説に関連してこれを論ずる場合前者は約理の二諦、後者は約教の二諦であると見なすことによつて、この新旧三論の両者を截然と區別せんとする見解が行なわれたことがあった。¹⁵⁾これに対して前述の指摘は、僧朗の南渡以前に約教二諦が大亮によつて提唱されていた点に着目して、撰嶺中心に展開した正統三論学派の学説には、北地からの伝承もあるが南地三論宗の思想的系譜が有力な支柱となつていと指摘して、三論の相承論に関する疑問を提起し、これが根本的な再検討を迫っているものである。筆者に於いても、三論教学の成立史的立場からはかかる視点はきわめて有意義なものであることはかねてより強調するところであるが、しかし、いま二諦説に関していえば、あらためて次の二つの点がいぜん問題として残されているように思うのである。すなわち、第一は羅什僧肇等によつて代表される関中三論の旧説が約理の二諦であるという従来の説は、そのまま妥当であるか見過していいのかどうかということである。批判説はこの点に関しては明確な解答を与えていないのである。第二に、三論学派の約教二諦説は成実の約理・約境の二諦説に対抗して打出された独特の学説であるが、この説の創唱者が果して広州の大亮であると断定することができるかど

うかということである。仮にそうだとして、広州の大亮をその創始者と見なすことをも含めて、約教二諦説の思想的系譜を、改めて確認する必要があるはしないかという、この二点である。

そこで、以下この点について再吟味して見ようと思うのであるが、単に歴史的な視点からのみ論ずることは、この問題の本質的な解明に役立つものとは思われない。それは吉蔵約教二諦説の根本義にかかわる問題だからである。

(二)

吉蔵の二諦説をいうとき、必ずといってよい程言及されるのは於教の二諦とか四重の二諦であり、二諦中道説等である。これらの学説は、なる程仏教全体の二諦論からいってもきわめて特色ある吉蔵独自の思想であり、その中心的な課題であることは勿論である。しかし、これらの説はいわば彼の二諦思想の全体的構造からいえば重層的発展的形態を示すものであって、ある意味でそれは彼の二諦論の根本構造から必然的に派生してくる始末的な問題であるとさえいってよいのである。われわれはその壮麗な上部構造に目を奪われて、それを支えている単純な下部構造をとみると見落しがちな点を否定できない。このような吉蔵の約教二諦の根本構造を示すものに、彼のいう三論二諦の「初章義」というのがある。すなわち、

(1) 『二諦章』上巻で、二諦の大意を述べ終った吉蔵がこれをしめくくるものとして次のように提示している。

今、他に対して二諦は是れ教門なりと明す。有の有なるべき無く、無の無なるべき無し。有の有なるべき無ければ無に由るが故に有なり、無の無なるべき無ければ有に由るが故に無なり。無に由るが故に有なれば有は自有ならず、有に由るが故に無なれば無は自無ならず。自有ならざる有は是れ無が有なり、自無ならざる無は是れ有が無なり。無が有は有ならず、有が無は無ならず。此の有無は不有無を表わす。

故に名ずけて教門と為すなり。(略)

一家の初章の言は方に此の如し。三論を学ぶ者は必ず須く前に此の語を得べし。(二五九・左下)

(2) 『中観論疏』巻第二末には十科に分つて八不義を釈する第五節の浅深門に、四重の二諦に約して自(三論)と他(成実)との差別を明す条に、正しく自他の相異を顕わすものとして次のような問答を設定している。すなわち、

問う、他も亦云わく、有を世諦と為し、空を真諦と為す。今と何の異ぞや。

答う、須らく初章の語をもって之を簡ぶべし。他の云わく。有の有なるべきあれば、則ち無の無なるべきあり。故に有は無に由らざれば、即ち無は有に由らず。有は是れ自ら有なり、無は是れ自ら無なりと。

今は、有の有なるべきなければ、即ち無の無なるべきなし。有の有なるべきなければ、無に由るが故に有なり。無の無なるべきな

ければ、有に由るが故に無なり。無に由るが故に有なれば、有は自ら有ならず。有に由るが故に無なれば無は自ら無ならず。有は自ら有ならざるが故に有に非ず、無は自ら無ならざるが故に無に非ず。有に非ず無に非ざれども、仮に有無と説く。

故に他と異なると為す。(大・四二・二七・下—二八・上)

と述べている。『中論疏』はさらに続けて、これを次のように四節に分けて自他の別を明らかにしている。すなわち、

初章者

(1) 他有^レ有^レ可^レ有^レ 即有^レ無^レ可^レ無^レ

今無^レ有^レ可^レ有^レ 即無^レ無^レ可^レ無^レ

(2) 他有^レ有^レ可^レ有^レ 不^レ由^レ無^レ故^レ有^レ 有^レ無^レ可^レ無^レ

不^レ由^レ有^レ故^レ無^レ

今無^レ有^レ可^レ有^レ 由^レ無^レ故^レ有^レ 無^レ無^レ可^レ無^レ

由^レ有^レ故^レ無^レ

(3) 他不^レ由^レ無^レ故^レ有^レ 有^レ是^レ自^レ有^レ 不^レ由^レ有^レ故^レ無^レ

無^レ是^レ自^レ無^レ

今由^レ無^レ故^レ有^レ 有^レ不^レ自^レ有^レ 由^レ有^レ故^レ無^レ

無^レ不^レ自^レ無^レ

(4) 他有^レ是^レ自^レ有^レ 名^レ有^レ故^レ有^レ 無^レ是^レ自^レ無^レ

名^レ無^レ故^レ無^レ

今有^レ不^レ自^レ有^レ 名^レ不^レ有^レ有^レ 無^レ不^レ自^レ無^レ

名^レ不^レ無^レ無^レ

此四節語為^レ初章^レ也(大・四二・二八・上)

吉藏『二諦章』の思想と構造(平井)

というのである。初章とは初学者の章門という意味である。⁽¹⁷⁾したがって、このように複雑な構造を示してはいるが、原意的には四重の二諦における初重の有無門を指していると考ええてよい。しかし吉藏は『二諦章』の中でとくにこの語の典拠を挙げて、⁽¹⁸⁾初章は一切の名教に通ずる先標の法門であると強調しているところから、このことばに特別な意義を付与しようとしたことは明らかである。このような用例は他にも見られ、例えば「方言」(標準の説ではないという意味)のありきたりの語を借りて、それが他にはない三論独自の説であることを説こうとする際に用いているなどその一例である。⁽¹⁹⁾この初章の語が、三論における約教二諦説の根本義であるとは、畢竟、有見に著する衆生のためには第一義諦を説き、無見に著する衆生のためには世諦を説いて、有無断常の二見を離れしめ、有無相即して一道清浄・不二中道を悟らしめるところに、諸仏が二諦によって説法する真意があると吉藏は解するからである。二諦を二種の真理の形式そのものと見る約理の二諦観では、容易にこの有無の相即を論理づけることが不可能であるばかりか、それぞれの二辺に墮すると考えられるからである。これをしばらく『大乘玄論』摂法門第八では次のように説いている。

問 何故以^レ二諦^レ無^レ教門^レ

答 以^レ有^レ無^レ為^レ教略有^レ五義^レ

(一) 対理明_二諦是教_一、以_二理無_一二故非有非無、今説_レ有説_レ無故有無_レ為_レ教

(二) 望_二聖人体_一、有無未_レ曾有無_一、今説_二有無_一、此為_二教縁_一、故有無_レ為_レ教

(三) 為_レ拔_レ見、旧義執_二有無是理_一、由来既久、即_二一見根深難_レ可_レ傾拔_一、撰嶺大師、対_レ縁斥_レ病、欲_レ拔_二見之根_一令_レ捨_レ有無兩執_上故。説_二有無_一能通_二不二理_一、有無非_レ是畢竟、不_レ応_レ住_二有無中_一、有無_レ為_レ教

(四) 以_二有無是諸見根_一、一切経論盛呵_二見_一、斥_二於有無_一(中略)故今明_二有無是教門_一、能通_二不二之理_一、不_レ応_レ住_二有無中_一、以_レ欲_レ息_二諸見_一故、経論明_二有無是教門_一

(五) 稟教之徒、聞_二有無是教_一、能通_二正道_一、超_レ凡成_レ聖、故有無是教(大・四五・二二・下―二三・上)

(三)

このように吉蔵の著作において「初章」ということばはきわめて重要な意義をもって登場していることが明らかとなったが、このことばは単なる修辭句ではなくして、或る一定の型と共通の内容をもったことばであることもまた明らかとなったはずである。ところで、現存の慧均『大乘四論玄義』の第一巻は、従来散佚に帰したと信ぜられ、現存叢書もその第一巻を欠巻となしているのであるが、横超慧日博士の発見せられた新出資料『四論玄義』の古写本によって、その第一巻の標題が「初章中仮義」であることが明らかにされた。²⁰同

博士はこの標題の「初章」とは如何なる意味であるかについて、「それは仏教の根本義たる中道へ入るための基礎出发点となる文章という意であり、或は又三論宗教義の基本的立場を端的に示したものと理解してもよい。」とされ、さらに語を継いで、「然らばその初章は何であるかというに、中仮義がそれであるとせられる。これには広略の二種があるが、略の初章とは『有有可有有是有故有今有不可有有是不有有』という語であり、要するに広略ともにこれによって中に入らしめんがために外ならぬ。」と解説しておられる。そこで前記吉蔵の語よりして慧均のいう略の初章とは「(他は)有の有なる可き有れば、有は是れ有なるが故に有なり。今は有は有なる可からねば、有は是れ不有が有なり。」と訓ずるのが至当であろうと考える。とすれば説相に幾分の違いはあるにしても、吉蔵においても慧均においても、初章ということばは共通の内容を意味し、一定の型を有するものであったということができる。すなわち初章とは三論宗の基本的立場、全教学を一貫する根本主題を意味するものであり、同時にそれは形式と内容において相即の有無を説こうとするものであったことが明らかである。ただ吉蔵は二諦義においてそれを強調し、慧均は中仮義がそれであると説いたのである。

したがって、このような形式と内容をもった一家初章のことばは、よく三論の約教二諦の根本構造を示すものであると

考えることができる。そこで、三論における約教二諦説の思想的系譜を尋ねる場合、先ずこのことが前提とならなければならぬ。換言すれば、かかる構造をもった三論初章の意にかなう二諦説の原型を、歴史的に遡って求めることである。われわれは、その原初的な型を、すでに関中における曇影の『中論序』や僧肇の『不真空論』において見ることができるのである。すなわち

(A)曇影の『中論序』は『中論』の要旨を二諦をもって要約し、

真諦を以ての故に有無く、俗諦を以ての故に無無し。真なるが故に有無ければ、則ち無なりと雖も而も有なり、俗なるが故に無無ければ、則ち有なりと雖も、而も無なり。有なりと雖も而も無なれば、則ち有に累らわされず。無なりと雖も而も有なれば、則ち無に滞らず。無に滞らざれば、則ち断無の見息み、有に存(累)せざれば則ち常著の氷消ゆ。此の諸辺を寂するが故に名ずけて中と為す。⁽²¹⁾

と結んでいる。『中論』の要旨を二諦をもって統攝した極めて簡潔で力強い表現である。これは阿含経以来の伝統的な有無断常の二辺を遮する中道宣表の型を、二諦を以て会通しようとしたものであるが、同時に有無相即の立場を強く打ち出して、俗諦の立場を真諦と等価に見ようとしていることは、インドの中観思想にはない中国的な展開であるともいえる。

(B)吉蔵は『浄名玄論』の宗旨義に「影公序三諦云」といつて、この曇影の『中論序』の一文を引き、これを次のように敷衍して行くのである。すなわち、

此の意を詳にすれば、「真なるが故に有無ければ、無なりと雖も而も有なり、」⁽²²⁾というは、即ち是れ、真際を動ぜずして諸法を建立するなり。「俗なるが故に無無ければ、有なりと雖も而も無なり。」⁽²³⁾というのは、即ち是れ仮名を壊せずして実相を説くなり。仮名を壊せずして実相を説けば、仮名と曰うと雖も宛然として実相なり。真際を動ぜずして諸法を建立すれば、真際と曰うと雖も宛然として諸法なり。真際は宛然として諸法なるを以ての故に、無に滞らず。諸法は宛然として実相なれば、則ち有に累わされず。有に累わされざるが故に常にあらず、無に滞らざるが故に、断に非ず、即ち中道なり。(卍・一・一・二八・五・四五二)

と述べて、「由三斯二諦一発三生二智」といつて『浄名経』の宗旨である二智を辨じているのである。『般若経』の「不動真際、建立諸法、不壊仮名、而説実相」は三論教義の眼目であり、この主題が後世さまざまに変奏せられて、三論のみならず、例えば禅においてもその主要な概念を形成して行くのであるが、吉蔵はこれを約教二諦の根本趣旨と見るのである。そしてそれを有無に即して説く原型を曇影の『中論序』に求め、これをもって一家初章の語と見なしているのである。

(C)同様の趣旨に基づいて吉蔵は、同じ羅什門下の僧肇『不真空論』にもその典拠を求めている。例えば『二諦章』に『大

品般若』の「菩薩住二諦、為衆生説法」（大・八・四〇五・上）という意味を解釈したあとで、「肇師論亦爾」として、

有を借りて以て無を出だし、無を借りて以て有を出だす。有を借りて以て無を出だすときは世諦に住して無の見を破し、無を借りて以て有を出だすときは、第一義諦に住して有の見を破す。故に二諦を説いて二見を破するなり。（卍・一・二二・三・二五二・左下）

と述べているが、これは『不真空論』の若し応に有なるべき即ち是れ有ならば、無と言うべからず、若し応に無なるべき即ち是れ無ならば、有と言うべからず、有といひ（無といひは）是れ有を仮りて以て非無を明し、無を借りて以て非有を辨せんが為なり。（大・四五・一五二・下）

(D)さらに『中観論疏』巻第二末に、周顒『三宗論』の二諦が『不真空論』に淵源することを述べて

論に云わく。有なりと雖も而も無なり。無なりと雖も而も有なり。有なりと雖も而も無なれば、所謂有に非ず。無なりと雖も而も有なれば、所謂無に非ず、此の如きは即ち物なきに非ざるなり。物は真の物に非ず、物は真の物に非ざれば、何に於てか而も物ならんや。（大・四二・二九・下）

と引いているのは『不真空論』の原文のままであるが、この文は曇影の『中論序』に極めて酷似したことばである。

かくて、吉蔵のいう三論初章のことばは、おそらくこの両

者の説示がその原型であったことは疑う余地のない所である。そして、三論約教二諦説の淵叢もまたここにあるのである。

(四)

以上の考察によって明らか如く、曇影や僧肇の思想に窺われる長安古三論の二諦観が、約理の二諦であるという伝統説は根拠のないものといわねばならない。近年大谷大学の福島光哉氏は、僧肇の二諦説との関連において梁代二諦思想の特質を論じた中で、僧肇の二諦義は空性を説明するための手段に過ぎず、二諦義そのものが諸法の実相と一致するとは言明し難いことを思想的に解明し、後の吉蔵等における三論の二諦教諦の淵源を僧肇に見出すことが出来ると鋭く指摘している。⁽²³⁾一説では、僧肇の二諦説が仮名と空との関係で扱われていないことを指摘して、南斉周顒の『三宗論』に説かれる「仮名は宛然として即ち是れ空なり⁽²⁴⁾」というような二諦相即の立場には未だ至っていないとする説もあるが、⁽²⁵⁾すでに見たように、真諦は非有を明かし、俗諦は非無を明かして、唯一の理（空性）を指示するものであるという、僧肇の真俗二諦の概念規定の中にわれわれは有無相即の立場を読みとることができるし、さらには『不真空論』の末尾に、万物が非真であるとは元来が仮号であるからと論じたあとで、先の『般若経』のことばを引いて、

故に經に云わく、甚だ奇なり、世尊よ、實際を動ぜずして諸の立
処と為す。真を離れて立処あるに非ず。立処は即ち真なり。

と述べ、自ら

然れば則ち道遠からんや、事に触れて真なり。(大・四五・一五三・
上)

と実践的なことばをもって結んでいる。これから推して
も、明らかに僧肇その人の思想に充分二諦相即の立場を窺う
ことができるのである。吉蔵が周顒の仮名空の二諦相即思想
の根源を僧肇『不真空論』に求めていることは、極めて妥当
であるといえなくはなからうか。したがって、周顒の仮名空
義や大亮の二諦言教の説は、実はこの曇影や僧肇にはじまっ
て吉蔵に至って大成する二諦思想の一大形成課程において、
思想的には同一の系譜上に連なる一支脈をなすものではあ
っても、それをもって彼らを三論における約教二諦説の創唱
者であったとみなすことはできない。少なくともその大成者
吉蔵の心証においてはそう見られていたのである。

以上のことを前提として、改めて問題の広州大亮の二諦義
について検討してみると、すなわち、『二諦章』巻上に吉蔵
はこれを次のように伝えている。

広州大高(亮)は二諦の義を釈して、また二諦はこれ教門なるこ
とを辨ず。彼は指をあげて喩となす。人の月を識らざるが為に、
指をあげて月を得せしむ。彼の云わく、月を識らざるが故に、指

を尋ねて月を得と。指を尋ねて指さす所を知ると雖も、指さす所
は竟に指にあらず。指さす所竟に指にあらざれば、指と月とはい
まだかつて同じからず。指を尋ねて指さす所を知る。指さす所は
指によって通ず。指さす所は指によって通ずれども、これに通ず
るは神会するに由る。指と月とはいまだかつて同じからず。指さ
す所は恒に指の外なり。(卍・一・二・二・三・二六〇・左上)

と云わく、真諦は本無を以て秤を受け、俗諦は仮有を以て名を得。
仮有は有が不有を表わす。断見を息めんが為なり、有を謂うに非
ず。本無は無が不無を表わす。常見を除かんが為なり、無を謂う
に非ず。有なりと言えども畢有ならず、無なりと言えども畢無な
らず。名相は未だ始めより一ならず、所表は未だ始めより殊なら
ず。

と述べている。この後段の二諦の説示は、よく三論初章の
二諦と本旨を同じくするものであることは、これまで述べ来
ったことから明らかである。したがって吉蔵は、

二諦の教によって不二を悟る、不二は是れ所表なり。指に因って
月を得る、月は是れ所表なるが如し。古人の釈、今と意同じ。

と賛意を述べているのである。ところで問題の指月の喩そ
のものは吉蔵もよく用いるが、必ずしも大亮の影響とばかり
いえないのは、この譬喩は大亮の独創になるものではなく、
すでに『大智度論』(大・二五・三七五・上)や『楞伽經』(十

卷本・大・一六・五八二(中)に説かれるところであり、『智度論』はいうまでもなく吉蔵の坐右の書であつたし、『楞伽経』も菩提流支訳の十卷本を吉蔵はよく依用しているからである。何よりも中国人自身の著作でこれを用いたものに、前述の曇影『中論序』があつたからである。したがって大亮をまつまでもなく、吉蔵はこれを熟知していたのが当然であつたろう。それ故問題の指月の喩をも含めて、三論初章の二諦義は広州の大亮の創始にかかわるものではなく、関中の曇影僧肇にはじまるものであることは明らかである。

また、二諦説の定義に関していえば、次の対照によつて明らかのように、前半は大亮のことばをそのまま採つてきたものであるが、後半の二句はむしろ僧詮『二諦疏』のことばによつたと見るべきである。僧詮の定義は巧みにアレンジされているが、大亮のものはそのまま依用していることはむしろ吉蔵の不用意によるものである。すなわち、

『大乘玄論』(大・四・二五・上)

『四論玄義』(卍・二・四・二六・左下)

(第四宋国北多宝寺広州大亮法師云)

二諦者、蓋是言教通詮、相待

二諦者、蓋是言教之通詮、相待

之仮称、

之仮称、

虚寂之妙実、窮中道之極号

非窮宗之実因也

『二諦章』(卍・二・二・三六・右下)

(第五撰嶺栖霞寺無所得三論大意大師詮法師云)

(山中師手本疏云)

意大師詮法師云)

二諦者、乃是表_三中道之妙教、
窮_三文言_一之極説
—— 二諦者、蓋是表理之極説、文言_一之妙教

前述のように、吉蔵が大亮の二諦説を比較的詳しく紹介しながら、その定義づけに関しては別に一言もいわないのは奇妙であるが、よほどこのことばが気に入っていたものと思われる。その意味で大亮の二諦説が吉蔵に影響をもつたということはできる。しかし、彼自身、初期の『二諦章』においては自家の説と同じであるといつて極めて好意的に遇しているが、晩年の『大乘玄論』二諦義においては、自身の見解か或いは編者の説によるものかは別として、成実の各師と並べて若し広州の大亮法師に依れば、定んで言教を以て諦となす。今は此等の諸師に同じからず。(大・四五・一五・上)

といつてその思想的な系列から明らかに除外しているのは、二諦章と玄論の間の時間の推移を思わしめると同時に、少くとも吉蔵の心証においては、広州大亮が三論相承説に重大な改変を迫るような比重を持つてはいなかったということを示すものである。ましてや単にこの一事を以て三論における約教二諦説の創唱者と見なすことは到底できないのである。

三 吉蔵二諦の発展的構造

このように曇影僧肇等によつて創唱された二諦の根本思想を三論初章義と称することによつて、自らの約教二諦説が関

中旧説（長安古三論義）の思想的嫡流であることを明らかにした吉蔵が、これに基づく発展的構造として次に提示したものが、「三重二諦説」である。この説ははじめ山門相承にして興皇祖述の「三種二諦」として次のように説かれる。すなわち、

山門は興皇に相承して祖述して三種の二諦を明かす。

第一に明さく、有と説くを世諦と為し、無と説くを真諦と為す。

第二に明さく、有と説き無と説くは二並びに世諦なり、非有非無不二と説くを真諦と為す。（中略）今更に汝が為に第三種の二諦の義を説かん。此の二諦とは有無は二、非有無は不二なり。二と説き不二と説くを世諦と為し、非二非不二と説くを真諦と為す。

二諦に此の三種有るを以て、是の故に説法は必ず二諦に依る。凡そ所発の言、此の三種を出でざるなり。（卍・一・二・二・三・二六〇・左下—二六一・右上）

という。これを吉蔵が三重の二諦と称するのは、第一に「又所_三以明_三三重二諦者、此三種二諦並是漸捨義」と称するように、次のような三縁の漸修漸捨の義を説くのがこの三種の二諦であると見ているからである。すなわち、第一種の二諦説は有を執する凡を捨てて諸法性空を真知する聖に入らしめるためであり、第二種は有無・真俗・生死涅槃の二辺を捨てて不二中道に入らしめるためであり、第三種はさらに、この遍と不二の中との対立を超え、非二非不二非偏非中の中道に入らしめるためであるという。すなわち、凡夫・二乗・

有所得の菩薩の三縁に対し、段階的に説かれたものであるから三重の二諦というに外ならない。

第二に、「又所_三以明_三三種二諦者為_レ対_三由来人_二」といって、現実には当時の成実論の、三仮を世諦とし、四忘を真諦とする約理の二諦説が初重の二諦に相当することを明し、これを破するために重ねて第二重を説く。（つまり、成実の二諦はいずれも第二重の世俗諦に攝される。）また、成実においても二諦の体として非真非俗の中道の義を説くというのであれば、それは第二重に相当することを示して、重ねて第三重を説いてこれを対破しようとしたと述べている。

このように三重の二諦は吉蔵の対成実との二諦論争の過程の中から形成されていったものであるが、これはまた最初に、三論の約教の二諦を説く根本趣旨が、一つには所依とする経論の正当な理解・解釈に基づくことと、一つには成実の約理二諦に対して建立されたものであることを思うとき、当然の展開であるといわねばならない。

各派との対外的論争を契機として形成された発展的構造を示す彼の二諦説としては、外に四重の二諦が説かれている。この両者の関係は至極明了であって、三重説の上にさらに對機を予想して加重されたものが四重説であって、この逆ではない。すなわち、前者を説くものは『二諦章』と『法華玄論』の二書であるのに対し、後者を論じているものは『中観

論疏』『大乘玄論』等の比較的晩年の作品であるからである。これをそれぞれの著作について比較対照すると次の如くである。

三重二諦

- 『二諦章』(平・三・三六・右)
- (一) 説有為世諦、説無為真諦
- (二) 説有説無二並世諦
説非有非無不二為真諦
- (三) 有無二非有無不二
説二説不二為世諦
説非二非不二為真諦

四重二諦

- 『中論疏』(大・四・三六・中)
- (一) 以有為世諦、空為真諦
- (二) 若有若空皆是世諦
非空非有始名真諦
- (三) 空有為二非空非有為不二
二与不二皆是世諦
非二非不二方名為真諦
- (四) 此三種二諦皆是教門
説此三門為令悟不二
(略)

不三為真諦

- 『法華玄論』(大・三・三六・上)
- (一) 以有為世諦、空為真諦
- (二) 以空有皆俗
非空非有為真
- (三) 不二為俗
非二非不二為真

『大乘玄論』(大・四・三五・下)

- (一) 以有為世諦、空為真諦
- (二) 若有若空皆是世諦
非空非有始名真諦
- (三) 空有為二非空非有為不二
二与不二皆是世諦
非二非不二名(方)為真諦
- (四) 此三種二諦皆是教門
説此三門為令悟不二
(略)

不三為真諦

一見して明らかかなように『中觀論疏』と『大乘玄論』は全文が完全に一致している。この両者と『法華玄論』では有と空が対立概念となっているのに『二諦章』のみそれは有と無で提示されている。これは吉蔵における空觀の論理表式がよ²⁶り中国的なものへの移行を示していると同時に、『二諦章』の成立が『法華玄論』に先行するものであることを示唆するものである。また第四重の二諦については言忘慮絶の不三を真諦となしているが、第三重までの三種の二諦は教門であるに對し、これは理そのものであるという疑念が生ずる。したがって『大乘玄論』『中論疏』ともにこれに對して、おのずから二諦を教となし、不二を理となすこともあるといい、若し二を以て世諦となし不二を第一義諦となすというならば、世諦はこれ教であり第一義諦は理であるといつて、転側適縁(真俗を教としました転勢して真俗を理教に分つことがあるのも、つまりは理教が縁によるからであるの意)にして妨ぐる所がないと会通している。これから推して基本的な構造において²⁷は三重二諦も四重二諦も同じであつて、この發展的二諦説の成立が専ら對機を予想する所に構築されたものであることが明らかである。そして四重の場合その對機が具体的に何であつたかについて、例えば『大乘玄論』には、

問う、何が故に此の四重の二諦を作すや。

答う、毘曇の事理の二諦に對して第一重の空有の二諦を明し、二

には成論師の空有の二諦に対して、汝の空有の二諦は是れ我が俗諦なれば、非空非有まさに是れ真諦なりとなす。故に第二重の二諦あり。三には大乘師の依他分別の二を俗諦となし、依他無生分別無相不二真実性を真諦となすに對して、今明すは、若しくは二、若しくは不二皆是れ我が家の俗諦、非二非不二まさに是れ真諦なりとなす。故に第三重の二諦あり。四には大乘師復言う、三性は是れ俗、三無性非安立諦を真諦となすと。故に今明さく、汝の依他分別の二真実不二是れ安立諦なると、非二非不二三無性の非安立諦なるとは、皆是れ我が俗諦にして言忘慮絶まさに是れ真諦なりとなす。(大・四五・一五・下)

と述べている。『二諦章』においては第三重の對機はごく一般的に「有得の菩薩」となっていたものが、ここではより具体的に撰論師の三性(真実性は真諦)、三無性となっており、さらに重ねて第四重を加えなければならなかったのは、撰論師の非安立諦(言忘慮絶の境)の提示に對処せんがためであったことが知れる。

このように三重二諦説は主として南地における成実の二諦説に對し、四重二諦説はさらに北地における撰論の學説に抗するために、専ら對機の面から重層的に構築された二諦説であるといふことができよう。そして吉蔵における約教二諦説の大意を、その思想の形成課程に即して見た場合これらはいずれも初章二諦義の根本構造に基づく一つの發展的構造を示すものである。吉蔵の發展的二諦説は何も以上の三重・四重

の二諦説にとどまるものではなく、例えば約理と約教二諦の相違を實踐的な得失の面において論じようとしたものに、有名な於教の二諦があり、彼のこうした種々の特徴ある二諦説の展開は、最終的には二諦論争の根本的な課題である世俗諦と勝義諦の相即如何の問題を論ずる一点に集約せられていくのである。三種中道説、或いは二諦中道説等の展開はこの極にあるものである。しかし、この点についてはさらに稿を改めて論ずることとしたい。

- 1 前田慧雲『三論宗綱要』西義雄「真俗二諦説の構造」(宮本正尊編『仏教の根本真理』一九七頁)侯外慮「三論宗吉蔵的二諦論和天台宗智顛的止觀論」(『中国思想通史』一六四頁)、佐藤哲英「三論學派における約教二諦説の系譜」(『竜谷大學論集』第三八〇号)福島光哉「梁代二諦思想の特質」(『仏教學セミナー』第二号)安井広済「中觀の二諦説と嘉祥の二諦説」(『印仏研』第二卷・第二号)村中祐生「嘉祥大師の於教二諦について」(『印仏研』第八卷、第一号)佐藤達玄「嘉祥の二諦思想について」(『印仏研』第八卷、第二号)等の諸論文が吉蔵二諦について論文している。

- 2 拙稿「二諦説より見たる吉蔵の思想形成」(『印仏研』第十二卷、第二号、昭和三九年・三月)
- 3 石田茂作「写経より見たる奈良朝仏教の研究」一三六頁参照。また同書は異本として『二諦義』一卷作者不詳が存し、天平十年(七三八)古文書に記載されていることをも同時に記録

している。

4 珍海『三論名教抄』巻第一に「章上巻雖云有十門、然其一部唯有七門、闕無三門、謂有無門、中道門、辨教門」（大・七〇・六九三・中）とある。

5 『義集』が如何なる書か今日不明であるが、年代的にも『山家祖徳撰述篇目集』巻上（大日本仏教全書巻第二）にある最澄（七六七―八二二）作と伝えられる『二諦義集』一卷であると考えられる。とすればこの『義集』は天台の二諦義であるが、最澄には別に『二諦義私記』一卷（『傳教大師全集』第三巻所収）が現存し、天台の二諦義を説明しているので重ねて著わしたとも考えられず、本来三論宗のものを誤って後人が最澄の作と見なしたのかも知れない。いずれにせよ珍海の時代に『二諦義集』という著述が存在したのである。

6 『成実論大義記』は今日現存せず『奈良朝現在一切経疏目錄』をはじめ我が国の各種経録にもその記載がなく、その組織内容についてはこれを知ることが出来ないが、安澄『中観論疏記』には次の各巻が引用されている。すなわち第一巻三蔵義・第五巻因果義・第七巻仮名実法義・第八巻二諦義・第九巻十八界義・第十巻五陰義・第十一巻三祖義・第十二巻十四種色義・第十三巻十煩惱義の各巻で、これによっても第八巻に「二諦義」の一章が存したことが知られる。（泰本融氏『国訳一切経』和漢選述部26・論疏部六「中観論疏解題」二四頁参照。）

(7) 拙稿「嘉祥大師吉蔵の基礎的研究」（『印仏研』第十四巻、第二号、昭和四十一年三月）参照。

(8) 泰本融氏「吉蔵における中観思想の形態」（『東洋文化研究

所紀要』第四十二冊、昭和四十一年三月）

9 『浄名玄論』（卍・一・一・二八・五・四六七・右上）

10 前掲泰本融氏『国訳一切経』「中観論疏解題」に東大寺所蔵古写本の一部が列記されている。

11 『仏書解説大辞典』巻第八、三一―一頁参照。

12 註(5)参照

13 註(2)拙稿参照。

14 伝記は『梁高僧伝』巻第七、釈道亮伝（大・五〇・三七二・中）にある。外に吉蔵の著作では二諦について『大乘玄論』『二諦章』にそれぞれ言及されており、また五時教判について、『大品遊意』に「広州大亮法師云、五時阿含為初離三蔵為第二如優婆塞經也般若維摩思益法鼓為第三法華為第四涅槃為第五也」（大・三三・六六・中）といっており、吉蔵はよく知っていたことが分る。

15 佐藤哲英氏「三論学派における約教二諦説の系譜」（『竜谷大學論集』第三八〇号、昭和四十一年二月）参照。なお広州大亮法師の約教二諦説が吉蔵の二諦思想に及ぼした影響については「二諦説より見たる吉蔵の思想形成」（『印仏研』第十二巻、第二号、昭和三十九年三月）の拙稿においてもこれを指摘している。

16 前田慧雲氏『三論宗綱要』参照。例えば一四九頁に「支那に於ても、約教の二諦を主として唱導せしは僧詮法朗以来なるが如し。」とあり、また一五七頁には「約理二諦は古三論の中僧詮以前即ち羅什・僧肇等の唱ふる所にして云々」とある。

17 「初章者学者章門之初故云初章」（『二諦章』巻上（卍・一・

二・二・三・二五九・左下)

18 同「此語出_三十地經第一卷、明一切文字皆初章所撰、今亦爾、初章通_二切法、何者有無作既然、例_レ之作故知初章通_二切法_一也」吉藏のいう『十地經』とは、北魏菩提流支訳『十地經論』(大・二六・一二九・下)を指す。

19 法朗祖述の説である三種中道について三種方言という。方言とは「方域の言」「方法の言」の意で法朗の八不を講ずるをいっただものらしいが、実際にはこの三種をさして方言という。『大乘玄論』巻第一に「明_三中道第六、初就_三八不_二明_三中道_一、後_二諦明_三中道_一、初中師有_三三種方言_一、第一方言云(後略)」(大四五・一九・下)の如くある。玄叡『大乘三論大義鈔』巻第二(大・七〇・一三三・中)に方言義の詳釈がある。

20 横超慧日氏「新出資料四論玄義の初章中仮義」(『印仏研』第七卷、第一号、昭和三十三年十二月)

21 『出三藏記集』巻第十一、曇影「中論序」第二(大・五五・七七・中)

22 柳田聖山氏は『唐中岳沙門釈法如禪師行状』の中にある「不動真際而知万象也」の一句を校註して、これが『金剛般若経』の「応無所住而生其心」とともに、初期禅宗の拠り所となった重要な思想の一つであるといっている。柳田聖山氏『初期禅宗史書の研究』四一九頁参照。

23 福島光哉氏「梁代二諦思想の特質―僧肇の二諦説との関連において」(大谷大学『仏教学セミナー』第二号、一九六五年十月)参照。

24 吉藏『中観論疏』巻第二末(大・四二・二八・下)

25 佐藤哲英氏前掲論文参照。

26 インドの中観派においては、有と無と対立しているものであつて、決して空と対立するものではない、といわれる。中村元氏「中道と空見」(『結城教授頌寿記念仏教思想史論集』一四三頁)参照。

27 『三論玄義』に「如撰大乘論明、非安立諦、不著生死、不住涅槃、名之為中也」(大・四五・十三・下)とある。唯識では四種世俗四種勝義を立てる中の、最後の勝義諦を指して非安立諦という。